



Title	抵抗への参加：沖縄戦の聞き書きの現場からの応答
Author(s)	石川, 勇人
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 52-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100159
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集2 第12回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
 テーマ：キャロル・ギリガンとケアの倫理

抵抗への参加： 沖縄戦の聞き書きの現場からの応答

石川 勇人

1. はじめに

今回、臨床哲学のフォーラムにご参加できることを光栄に思います。貴重な発表の機会を与えてくださった小西先生をはじめ、関係者の皆様にお礼を申し上げたいと思います。

私は、フェミニズム研究・ジェンダー研究を基軸に研究を展開してはいませんが、後ほど紹介するように、沖縄戦体験者に聞き取りを行い、その語りを考察する「聞き書き」と呼ばれる手法を取り入れた研究を行っています。いわゆるオーラル・ヒストリー、エスノグラフィーといったアプローチに近いかと思います。

さて、ギリガンの『抵抗への参加 フェミニストのケアの倫理』を拝読しながら、私の頭の中を渦巻いていたのは、私は沖縄戦体験者の「声」を本当に聞き取れていたのか、という疑問でした。今回の発表に至って、改めて自身の研究実践を思い返しましたが、私は沖縄戦体験者と出会う中で数多くの「失敗経験」をしてきたと思います。

そこで本日の発表では、私自身が行っている沖縄戦の「聞き書き」の現場での出来事とギリガンの議論を往還しながら、他者の声を「聞き書き」する意味について考えてみたいと思います。

2. 家父長制への「抵抗」

私自身の「聞き書き」実践を考察する前に、『抵抗への参加』でギリガンが展開した議論の一部を整理してみたいと思います。

ギリガンは第1章の中で、自身の調査経験の一端を紹介しています。例えば、ギリガンがアイデンティティと道徳的発達の研究に着手するようになった動機として、コールバーグの授業でディスカッションを観察した時のことを紹介しています。その話の中でギリガンは、「ベトナム戦争の不正義については話したがるのに、兵役拒否の倫理に話題が及ぶと口をつぐんでしまう」（Giligan 2011=2023: 25）男子学生たちの話を取り上げています。なぜ、男子学生たちが言葉を紡げなくなるのか、ギリガンによれば「自分たちが本当に考えていること、すなわち関係性と気持ちにある程度依拠してしまう兵役拒否についての自分の考えを口にしてしまうと、女っぽい発言に聞こえそうだし、道徳的発達段階が低いと見なされ」（Giligan 2011=2023: 25）てしまう、と男子たちが認識しているからだと言っています。こうした発達過程の中で経験する「家父長制への通過儀礼」によって、「人間は声と記憶を喪失し、みずからの物語を正確に語るができなくな」り、かつ、その「喪失の痕跡や何らかの傷がこどもたちに残」

((Giligan 2011=2023: 33) ってしまうと述べています。

さらにギリガンは、この家父長制の通過儀礼は、相互理解、共感、相手のところを察するといった能力を破壊、もしくは周縁化するものとして機能するとも述べています (Giligan 2011=2023: 83)。こうした通過儀礼を通じて、少年・男性たちは「ケア」を手放すことで、「ケア」は女らしさのものであるとされてしまうのです。だからこそ、家父長制文化を迎合している限り、「ケアの倫理はジェンダー化された女らしさの響きから逃れることは困難であり、したがって、その真価を発揮できない」(Giligan 2011=2023: 239) ことになってしまうのです。

3. 沖縄戦体験者の「抵抗」― 聞き取れなかった「声」

ところでギリガンは第2章で、ニューヨーク大学で、心理学を研究する博士課程の学生を対象とした聞き取りのゼミの話を紹介しています。例えばエリカは「10代の少年は中絶をどのように経験するのか」(Giligan 2011=2023: 90) という問いを立て、TJにインタビューを行ったという話が綴られています。そのインタビューを通じて、エリカ自身がインタビュー時に持っていた思い込みのせいで、見えなかった事実があったということに気づいたというエピソードが紹介されています。ギリガンが総括しているように、学生たちは聞き取り実践を行う中で、「ほかの人間に耳を傾けることから、学生たちが自分自身に関して学」び、「インタビュー対象者に関して学んだ」(Giligan 2011=2023: 86) のです。

この一連のエピソードは、私自身の沖縄戦の「聞き書き」実践とも重なる部分があります。ここからは、私のフィールドである沖縄戦体験者との「聞き書き」実践とギリガンの議論を交差させながら、自身の研究内容を考察してみたいと思います。

私は2018年から沖縄戦体験者の話を「聞き・書く」という「聞き書き」実践を行っています。この実践の中で私自身が常に意識してきたことは、沖縄戦体験者の語りを通じて、沖縄戦・沖縄戦後史のつながりを素描することでした。より詳しく述べるなら、1人の人間がいかなる戦争・戦後体験をしたのかという事実だけでなく、その体験に張り付く1人ひとりの感情も記述するのが、私が試みていることだと言えます。とはいえ研究を始めた当初は、戦争・戦争後のつながりは、全く意識していませんでした。

そのつながりを認識することができなかったのは、私自身の「家族史の空白」が関係しています。私は幼少期の頃、母方の祖母と時間を過ごすことが多かったのですが、その場で1度も戦争体験が語られることはありませんでした。また、両親を通じて祖母の戦争体験を聞いたこともなかったです。ですので、私は第三者との関係性を通じて、沖縄戦・沖縄戦後史に接近していったと言えます。

私は約50名の沖縄戦体験者に聞き取りをしてきましたが、なかでも学部4年生の時に戦後公的な場で証言活動をしたことがないと語ったAさんとの出会いは、私の「聞き方」を大きく変えたと思います。3時間にわたる沖縄戦の聞き取りを終えた後、Aさんに大きなため息をつかれたことがありました。私は当時、Aさんに沖縄戦中の話だけを「聞き書き」していました。しかし、Aさんが本当に語りたかったのは、戦争中の傷が今も続いている、そして戦後も戦争の記憶に苦しめられてきたという「戦後」

の話だったのです。私が荷物をまとめて帰宅しようとした際、「爆弾から生き延びることだけが、戦争体験じゃないんだよ…」と、Aさんが涙を流しながら私に語りかけました。その時初めて、沖縄戦体験者にとって戦争と戦後が連続しているということに気づきました。

その出来事をきっかけに、私が「聞き書き」をしたAさん以外の沖縄戦体験者の記録を読み返してみたところ、ほとんどの沖縄戦体験者が戦争中から戦後の話を「聞き手」である私に語っていたのです。「聞き手」である[わたし]に向かって、戦時と戦後が地続きであると語っていたにもかかわらず、私には聞こえていない声があったのです。

4. 求められる声だけに応答する

第2章の中で、ギリガンと彼女の共同研究者たちが、幼少期中期から思春期にかけての少女たちを観察した話を紹介しています。その中で、「思春期の岐路に立った少女たちは、彼女らを屈服させようとする圧力にさらされた結果、自分の正直な声を守るためにそれを自分の中に隠し」、「自分のところを裏切る」(Giligan 2011=2023: 78)という指摘をしています。そうした少女たちのつぶやきに耳を澄ませる中で、ギリガンは少女たちが発する「抵抗の声」は「必ずしも他人が聞きたいと望むような、耳に心地よい声であるとは限らない。それは、家族、学校、コミュニティにトラブルを起こすかもしれない声」(Giligan 2011=2023: 77)でもあると説明しています。

ギリガンの「自分のところを裏切る」という指摘は、沖縄戦体験者Bさんの「聞き書き」を彷彿とさせました。Bさんは文筆家・新聞記者の取材を数回受けた経験がある方でしたが、私の「聞き書き」の中で「これまでの聞き取りでは、自分の本音が話せなかった、[聞き手に：引用者注] 語りを受け止めてもらえないという感覚を抱いていた」と語りました。Bさんは沖縄戦の時に親族を亡くしていますが、その時の「聞き手」にはその話はせず、聞き手の質問に淡々と応答したと語りました。つまりBさんは、自身が最も伝えたいことではなく、「聞き手」が求める声だけに応答していたのです。ギリガンやBさんの誇りから考えるべきは、「語り手」が語りを取捨選択しているということではなく、むしろ、そうした1人の人間が生きてきた歴史的・社会的文脈をはじめから「わかった気になって聞いている」(直野2004, 山本2022) 聞き手たちの態度によって、「語り手」たちが声を奪われているということではないでしょうか。

ところでギリガンは、序章において「人間が本来、応答し、かかわり合う生き物であり、ひとつの声をもって関係性のただなかに生まれ、共感と協力のための能力が備わっている」(Giligan 2011=2023: 3)と述べています。だからこそギリガンは第1章において、「みずからの声を押し殺し、何を考え、何を感じているかを言葉にしないことは、関係性を放棄することであり、他者とのつながりの中で生きる可能性をあきらめる」(Giligan 2011=2023: 44)と述べています。そうした沈黙へと追いやられる声を掬い上げるためにも、ギリガンは少女たちが語る関係性の危機に耳を傾け続けたのでしょう。とはいえ、この一連の作業を誰でも行うことができるのかという疑問も抱きます。むしろ「語り手」とギリガン(あるいは学生たち)の間で関係性が築かれたからこそ、ギリガン(あるいは学生たち)は人々の声を「聞き書き」することが

できたのではないのでしょうか。

ここで、ハンセン病患者への「聞き書き」経験を綴った社会学者の蘭由岐子の経験を取り上げたいと思います。蘭はハンセン病患者の聞き取りを行う中で、患者たちが「聞き手」がお茶を飲むかどうかを見極めているというエピソードを紹介しています。患者たちは、「聞き手」がお茶を飲むかどうかで「病気の感染を相手が気にしているかどうか、そしてまた生理的嫌悪感をもっているかどうか」（蘭 2017: 25）の見極めを行っているというのです。実際に筆者もBさんから数品の食べ物を出され、それに手をつけるかどうかを見極められたことがあります。こうした事例も踏まえると、「語り手」はどういった「聞き手」に本音を語るべきかを「聞き書き」の場を通じて見極めていると言えるでしょう。

しかしながら、こうした「語り手」と「聞き手」が出会い、語りを生成する「聞き書き」の場を考えた際、その場で理路整然とした語りが提示されるのは、ごく稀なケースではないのでしょうか。私自身、「聞き書き」を続ける中で「語り手」に辛い話（トラウマ的記憶を再帰させるような話）を尋ねることがありましたが、その話になると急に言葉が出てこない、これ以上は話したくないなど、「語り手」の「声の喪失」・「沈黙」などに幾度も遭遇しました。とはいえ本書を読む中で、沖縄戦体験者は語る言葉を失っているというよりは、むしろ、なんとかして自身の体験を「聞き手」である私に届けようとしていたとを感じるようになりました。実際にギリガンが本書全体を通じて描いたのは、沈黙を抱えていたり、困難に直面したりしながらも、それになんとか抗い言葉を掴み取ろうとする人々の姿なのでしょう。

5. 「抵抗」を感知するために

最後になりますが、ギリガンという1人の人間（あるいは第2章で取り上げられている学生たち）が、いつ、誰と出会い、その時に何を学んだのかを考えることも重要だと考えます。すなわち、「聞き手」がいかなる過程を経て「聞き手」になり、そして「抵抗」に参加していくのか、そのプロセスを注視することも、語り手たちの「抵抗」を理解する上で必要不可欠だと思うのです。例えば、謝辞では、ギリガン自身が誰と出会い、誰の影響を受けながら研究を展開してきたのかが綴られています（Giligan 2011=2023: 233-236）、こうした記録は、ギリガンがいかなるプロセスを経て人間の「抵抗」を感知するようになったのか、その一端を理解する手がかりになるのではないのでしょうか。

たしかに存在している人々の痛みが忘却されそうになった時、その忘却に抗う形で抑圧下にいる人々は、わずかながらも「抵抗」を示すのかもしれませんが。微かなつぶやきとして聞こえてくる人々の痛みを聞くためにも、「聞き手」の姿勢を問い直すこと、そして抑圧下にある人々の視点から、歴史を学びなおすことが求められているのでしょう。

参考文献

- 蘭 由岐子, 2017, 『新版「病いの経験」を聞き取る ハンセン病者のライフヒストリー』, 生活書院。
- 上野千鶴子, 1997, 「<わたし>のメタ社会学」, 『岩波講座 現代社会学 1 現代社会の社会学』 47-82頁, 岩波書店。
- 直野 章子, 2004, 『原爆の絵と出会う—— 込められた想いに耳を澄まして』, 岩波ブックレット。
- 宮地 尚子, 2007, 『環状島＝トラウマの地政学』, みすず書房。
- 山本真知子, 2022, 「弔いの場をひらく：沖縄戦体験者の家族のナラティブを通して」, 『沖縄文化研究』 49号 131-174頁, 法政大学沖縄文化研究所。
- Giligan, Carol, 2011, *Joining the Resistance*, Cambridge: Polity Press. (小西真理子・田中壮泰・小田切建太郎訳, 2023, 『抵抗への参加 フェミニストのケアの倫理』, 晃洋書房)

(いしかわ・ゆうと)